

新刊紹介

Keiji Nishitani: Religion and Nothingness. Translated with an Introduction by Jan van Bragt, pp. xlv+311. University of California Press, Berkeley • Los Angeles • London 1982, 33 \$

Keiji Nishitani: Was ist Religion? Übertragung von Dora Fischer-Barnicol, 437 S., Insel-Verlag, Frankfurt a. M. 1982, 78 DM.

この二書は、西谷啓治博士著『宗教とは何か』（創文社、一九六一年初版）の英訳本であり独訳本である。

私達には二十余年前から親しまれている本の訳書をここに取りあげるのは、新刊紹介にあたらなとも思われよう。しかし、日本語において自からの表現を得た思想が、異なった伝統・文化に立脚する人を感動させ、その心音を調律し、時満ちて、以前とは別な言語体系の中に開花したということは、原著に親しむ吾々にとっても根本的に新しい出来事として出会われる。

両訳書には、懇切な訳者緒言がついている。それらは単なる著者紹介の域を越えて、東洋の思想（仏教特に禅）、日本における西洋との出会い（明治維新）と出会い方（京都学派）について述べ、両訳書によって綴られる世界の経歴を明かしている。ブラフト教授もフィッシャー・バルニコル女史も共に、日本が今日なお西洋にとって如何程の距離にあるかを計測できる人であり、その故にこそ、彼らの心根を揺り動かし、現に生きて働く東洋の心をその実相において明かし知らせようと努めている。両者は、原著、

の思想が、日本における西洋思想との如何に長く且つ深い交渉、如何に真剣な対決と統一の試練を経歴して出現したものであるかを明かし、ここにその克服が試みられている問題が、如何に西洋自身の歴史をもその根底から穿ち貫くものであり、今日の西洋自身の運命であるかを告げようとしている。この書によって、西洋は新たな歴史的局面、すなわち、従来の西洋と東洋という枠組がもはや無意味に帰す深層において、東西が運命共同体となったこの一つの現実の世界において、自ずからの運命を自ずから負うて立つべき局面に連れ出されて有ることを告げ（特に独訳本訳者緒言）、また訳者自身がこの局面において一つの応答を試みようともしている（特に英訳本訳者緒言）。独訳本によって原著者の思想に一早く反応したW・シュトルツ氏も言うように、西洋はまさしくこの書を、「キリスト教—仏教の対話を通じて、これまでにこのような深さで論究されたことのない諸根本問題への眺望を開く」として受容した（「Neue Zürcher Zeitung」一九八三年二月十五日付文芸欄）。

原著はまず、J・D・ロウ氏によってその第一編が英訳され（「Philosophical Studies of Japan」, Vol. 2, 1960）、残り五編はブラフト教授によって『東方仏教徒』誌上に英訳されたが（一八七〇—一八八〇）、今回の英訳本出版にあたっては、全体的な統一と読みやすさを計るため、教授及びJ・ハイシク氏によって第一編をも含めた全訳が書き改められたようである（詳細は訳者緒言参照）。この「改訂」に原著者は関与していない。

独訳は両雑誌の英訳に基づいてなされたが、多義にして独語が定め難いと訳者に思われた箇所については、原著者に問い合せるという方法がとられた。最近、独訳本の詳細な内容紹介と英独両

訳についての親身な書評を表わしたH・ワルデンフェルス氏は、語の制約に基づく一つの誤訳を指摘している。原著では実存的と実存論的とは明確に区別されているが、英語にはこの区別なく共に existential となる。その英語によった独訳は、元来ドイツ語の existenziell と existenzial の区別に由来する両語を、区別なく existential (existenzial) と訳したところなのである（“Zeitschrift für Missionswissenschaft und Religionswissenschaft”, Heft 4, 1983）。

両訳書には、原著ではわからない用語の出典が、『東方仏教徒』に付された数以上に丹念に「註」されてあり（特に独訳本）、この点でも原著者が立つ大地の広大さをしのばせてくれる。本文中の中国人名については、日本読みと共に中国発音でも記した英訳

本の方が親切であろう。独訳本末の「索引」には日本語サンスクリット両語に渡って誤記が少しある。

最後に、この思想の一基本語である回互的の訳について述べれば、英訳者は神的人格の三位一体関係を表わす：“circuminsession”を訳語とし、独訳者はこの訳によらずあつちりこ“wechselseitige Durchdringung”とした。前者はこの語の有する理の次元を取り、後者は事の次元を選んだと言えよう。原著ではただ一つの「回互的」である。西洋には空の思想が、そのダイナミズムが未だ届かぬと言つてすますことは出来ない。両訳書の出版というこの出会いを吾々は如何なる現で受けとめ得るであろうか。

なお、英訳本の方には、最近、廉価版も出版された。

（堀尾 孟）